



作家
元国際線乗務員
黒木安馬

【プロフィール】高校時に米国留学後、早稲田大学を経てJAL国際線客室乗務員として30年勤務。世界初の「カラオケ・フライト」や「1万メートル上空・北島三郎機上コンサート」などを実現させる。千葉の自宅は1300坪の山林を開墾してプール、テニスコート、コンサートホール等を手作りする。現在、(株)日本成功学会社長として自己啓発や社員教育で講演中。著書に『ファーストクラスの心配り』『あなたの人格以上は売れない!』(プレジデント社)、『成「幸」学』(講談社)、『出過ぎる杭は打ちにくい!』(サンマーク出版)、『面白くなくちゃ人生じゃない!』(ロングセラーズ)、『小説・球磨川』(上下巻・ワニブックス)などがある。
E-mail:yasuma@myad.jp URL:http://www.3percent-club.com

21世紀だ！———人生・農業リセット再出発 166

エジソンになり損ねた男

東 日本大震災の直後に東京都内でもあらゆる店の棚から消えてなくなった物がある。停電になれば、まず必要なのは電池。不自由して初めて大切さが身に染みる。携帯電話もリモコンも何もかもが電池のない状態での現代生活は考えられない。そのなくてはならない乾電池は誰が発明したのだろうか？ 実はろくに教科書にも紹介されていないが、日本人なのである！

5年後に明治維新が始まろうとする江戸時代の終わりに、新潟長岡藩の武士の家に生まれた男がいる。6歳で父を亡くし、母や姉と親戚の家に身を寄せて暮らした。激動の維新のなか、13歳で長岡から9日間もかけて東京まで歩き、時計店に丁稚として就職する。技術職人になって家名を興すのが夢だったが、無念にも病に倒れてすぐに故郷へ舞い戻ることになる。長岡には横浜の外国人と商取引している豪商があり、その店では外国製の時計も販売していた。銀座の服部時計・セイコーが店を出す前の時代である。屋井先蔵少年は、その「絹五」の店で時計修理工として7年、修行を積む。やがて修理では飽き足らず、やはり東京へ出て機械を勉強したくなる。地元出身の国会議員の書生をし、夜は東京物理学校(現・東京理科大学)に通いながら、職工学校(現・東京工業大学)を受験するも失敗する。翌年、年齢制限最後のチャンスで受験するが、今度は寝坊して試験開始時間ぎりぎり5分前で入場を断られて夢がなわず。学校の時計は、よその時計より進んでいたのである。その時代は、どこの時計も針が差す時刻はまちまちだった。それが先蔵を発奮させた。鉄道も郵便もこれからの時代には正確な時刻が求められるはずだ。睡眠時間も削って研究に没頭して完成させたのが、電気の作用で周りの時計も一斉に同じ時刻を指す「連続電気時計」だった。

電圧をボルトで表示するが、これはイタリアの物理学者、アレッサンドロ・ボルタが1800年にボルタ電池を発明した名前に由来している。だが、この電池は現代の車のバッテリーに似た液体式のもので、大きくて重く、電解液もこまめに替える手間、腐食も激しく、持続時間も短かった。先蔵は、不眠不休の実験を重ね、亜鉛の筒に炭素棒を入れたところ、ついに液体を使わない世界初の「乾電池」を発明した。明治20年(1887年)、24歳のことである。人類史上の大発明であったが、このころはまだ特許の重要性が理解されておらず、先蔵にはその申請費用もなかった。浅草の長屋に所帯を構えて「屋井乾電池合資会社」の看板を掲げたが、さっぱり売れなかった。乾電池を使う電化製品などほとんどない時代だから、発明が早すぎたのだ。

翌1888年に米国で開催されたシカゴ万博に、日本から出品された地震計に先蔵の乾電池が使用された。ところがそれから2年後、ドライ・バッテリー(乾電池の直訳)として米国製が日本に輸入され始めたのである。特許を申請していなかったばかりに、世界史の偉人伝から素通りされてしまい、1900年にはエジソンがさらに改造して世界普及に弾みをかけて有名になる。その後、日清、日露戦争と大戦が続き、寒冷地でも凍結しない小型軽量の屋井乾電池は戦場の無線機などで大活躍する。中国やロシア軍の電池は電解液が凍結して使い物にならず、新聞は屋井乾電池が我が国に大勝利をもたらしたのだ！と褒め称え、一躍需要が広まることになる。大正天皇陛下に茶会に招待されるなど、越後の貧困少年は、国民的ヒーローとなった。

往々にして、成幸者は貧乏に育ち、そのなかでたくましく努力を続けて結果を出した人が多い。最大のライバルは他でもない、自分自身である！ そのことを知っている人たちであろう。